

# 「内外合一」を唱えたのは華岡青洲でなく 仁井田好古である

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成28年10月4日／受理：平成29年4月12日

**要旨：**華岡青洲は「内外合一活物窮理」の八文字の標語を唱えたと江戸時代末から考えられてきた。青洲がこの標語の後半の四文字「活物窮理」を唱えたという確証は存在するが、前半の四文字「内外合一」を主張したという史料は存在しない。関係史料の精査によって、著者はこの「内外合一」の四文字は青洲の墓誌銘のために仁井田好古が1835年に作った熟語であることを明らかにした。青洲は内科と外科の兼学を強く主張したが、しかし両科の統合は考えていなかった。したがって「内外合一」は仁井田の造語に関わり、「活物窮理」のみが青洲の標語である。

**キーワード：**華岡青洲、仁井田好古、活物窮理、内外合一、墓誌銘

## はじめに

華岡青洲(1760-1835, 以下「青洲」と略)の標語として「内外合一活物窮理」の八文字が呉 秀三の著書「華岡青洲先生及其外科」に示されている<sup>1)</sup>。呉の著は1923年の発刊以来ほぼ半世紀近くも青洲に関する唯一の著書であったこともあって、それ以後に出版された富士川 游<sup>2)</sup>、関場不二彦<sup>3)</sup>、大鳥蘭三郎<sup>4)</sup>、森 慶三ら<sup>5)</sup>、藤野恒三郎<sup>6)</sup>、宗田 一<sup>7)</sup>、さらに阿知波五郎<sup>8)</sup>などの諸家による日本医学史の著書では「内外合一活物窮理」を青洲の標語とする呉の説が踏襲され普及されて現在に至っている。このような状況を反映してか、現在、多くの一般の人たちが閲覧活用しているインターネットのWikipediaで「華岡青洲」を見ると、「青洲の医術」の項で「青洲は常に『内外合一活物窮理』を唱えた。」と記してあり<sup>9)</sup>、Googleの検索サイトで「内外合一」を見ても多くの人々はこの語句を青洲の言葉としてある<sup>10)</sup>。したがって、一般の人たちはもちろんのこと、医師などを含む医療関係者、さらには医学史研究者でさえ、上記の八文字「内外合一活物窮理」のすべてを青

洲が唱えた標語と信じていることは明らかである。

著者はこの標語の前半「内外合一」と青洲の主張する「内外に精しく」との間に少しく齟齬があると感じ、これら八文字の標語すべてが青洲自身の言葉であるとする見解に疑問を持ってきた。しかし、これを否定する決定的な証拠を提示できるまでは先学の見解を踏襲するのが当然であるので、違和感を感じながら、従来の説に従って「内外合一活物窮理」を青洲の標語として拙著において論じてきた<sup>11)</sup>。

改めて関連史料を鋭意渉猟し検討を重ねた結果、標語としての「内外合一活物窮理」の八文字は紀伊藩の儒者仁井田好古(1770-1848)が1835年に撰文した青洲の墓誌銘に初見される句であり、青洲自身が主張したのはこの標語の後半「活物窮理」の四文字だけであることが明らかになった<sup>12)</sup>。このため標語前半の四文字「内外合一」は仁井田自身の造語ということになる。したがって「内外合一」を青洲の言葉として「内外合一活物窮理」を説明してきた著者を含めた諸家の見解は誤っていることになる。例えば、著者の「内外合一」を「活物窮理」の条件、すなわち「内外合一」

をしなければ「活物窮理」を達成できないとする考えは、「内外合一」が青洲自身の言葉であれば成立するが<sup>11)</sup>、青洲の言葉でないとするれば、この論は成立しないことになる。さらに「内外合一」が長年に涉って青洲の言葉と見做されてきたために、この句について朱子学と関連付ける誤った解釈も生まれている<sup>13)</sup>。本稿では「内外合一」の句についてその成立の経緯を述べ、青洲の標語、延いては青洲の医学に対する正しい理解のためにも、従前の誤った見解を改める必要があることを強調したい。

### 1. 江戸期の諸史料に見る 青洲の「内外」に関連した記述

確実に青洲の言を伝えていると考えられる江戸期の史料の内、「内外」の語句が披見される信頼すべき史料について年代順に示して簡単に説明する。

#### (1) 「乳巖治験録」

この史料は書写の年紀を欠くが、1804年の末から1805年の初めにかけて書かれたと推定される<sup>14)</sup>。一丁表一行目に「余、嘗て父の業を継ぎ、内外の治を行うこと、已に二十有余載。」(原漢文)(図1)とある。父の医業を継いでから二十数年間医療を行ってきたという意であるから、ここでの「内外」は「内」つまり内科と「外」つまり外科という特定の科の医療のみを意味しているのではなく、「内」と「外」で診療科、つまり医療を代表させたものである。つまり、「内外の治」は医療一般を意味している。このことは青洲が外科、内科のみならず、外傷、整骨、産科などの患者も診療していたことから明らかである<sup>15)</sup>。すなわち、「内外の治」は医療全般を意味しており、そうすると「内外」の二文字は診療科全体のことであり、「内外」によって診療科を代表して表現したものである。

#### (2) 「序」

「序」は青洲直系の子孫宅から発見された四葉の紙片に書かれた文章で、高橋らが詳しく報告し

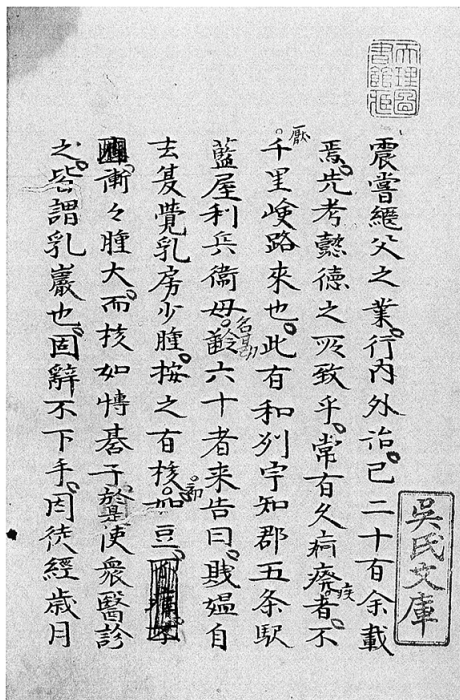


図1 「乳巖治験録」1丁表. 第1行に「内外」の文字が見える。(文献9より)

た<sup>16)</sup>。書写年代は明らかでないが、「序」と題していることから何かの著述の「序」として準備されたとも考えられる。これを考慮すると、青洲が著述の意図を持っていた文化年間前半以前の作と推定されるが、その正確な成立年代を特定することは出来ない<sup>17)</sup>。「序」は青洲が医学についての見解を述べたもので、本文15行の文章の中に「内外」の熟語が3回披見される。短い文章に「内外」の語が3回も出現することは、この頃、青洲が「内外」に強い関心を寄せていたことを窺わせる。この熟語を含む文を以下に読み下し文として抄出する。新字体、新仮名遣いとした。

- 先に疾医、瘍医、内外の分有り。内を重んじ外を軽んずるは、古より已然たり。
- 而して其の理を究めれば、両ながら相い得て内外を知る。是において始めて與に瘍医と言ふべし。
- 余嘗て曰く。疾病を救わんと欲すれば、当に其の内外に精しかるべし。

最初の条の「内外」は、「疾医」すなわち「内科医」、「瘍医」すなわち「外科医」に対応する語句であるから、分科としての「内科」と「外科」のことである。昔から内科が外科よりも重視されてきたというのである。次の条の「内外を知る」とは「両ながら相い得て内外を知る。」とあるから、内科的知識を得た上で外科の知識・技術を習得すれば、つまり両者を究めれば、初めて外科医ということが出来るとあるから、ここでの「内外」は内科の臨床的知識、外科の臨床的技術に加えて、人体内外の構造、機能についての基礎的知識をも含むのではないかと考えられる。これは「内外」の前に動詞「知」があることによって了解される。最後の条の「内外」について、直前の「其」は強調の意の助辞ではなくて、指示詞の「其」で「疾病」を指すと考える。「其内外」は「疾病の内外」、つまり疾病の有する内科的側面、外科的側面ということになる。したがって、この文は「疾病を治療しようとするれば、疾病の有する内科的側面、外科的側面に精通していなければならない。」となる。「精」は精通すること、知悉することである。なおこの「序」では「内外」に関連して「合」の字ないし「合一」の句が用いられていないことに注目すべきであろう。

後述する「書」では「救」の代わりに「療」の字が使用されている。「救」はその有する多くの語義の中で治療に関するのの一部であるが、「療」の語義の大半は治療に関係している。「療」の字に変えることによって、治療ということを一層強調したのであろう<sup>18)</sup>。「救」から「療」への変化は青洲の思想の内的発展を傍証する痕跡ではないかと考えている。

### (3) 「燈火医談 後篇」

1861年に佐藤持敬が編纂した「華岡氏遺書目録」<sup>19)</sup>によれば、青洲には数十冊の著述がある。本稿で問題にしている「内外合一」は医学全般を論じている書冊に披見されるはずで、外傷や乳癌など個別の疾患を各論的に論じた著述には記述されていないと考えられる。医学全般を論じた代表的著述は「燈火医談」であり、「青洲医談」である。

これら二著の写本すべてを精査した訳ではないが、現在の知見では「内外」の語句ないしこれに関連した記述は以下に示すように「燈火医談 後篇」に披見される。

凡(ソ)、外科ヲ為ント欲(セ)ハ、先(ズ)内科ヲ精(シク)スヘシ、然ラサレハ治術ニ益ナシ<sup>20)</sup>。(句読点一松木、括弧内に片カナを補った。)

呉はその著の中でこれと同じ言葉が「青洲医談」に見えるとしているが<sup>21)</sup>、宗田によれば「燈火医談 後篇」は題名が異なって「青洲医談」となっている場合もあるという<sup>22)</sup>。しかし手元にある「青洲医談」の一写本ではこの記述は見られない<sup>23)</sup>。書写が繰り返されたことによって佐藤持敬のいういわゆる「同名異書」ないし「異名同書」の状態となったものであろう。

いずれにせよ、上記の言葉は外科の診療を行う上で、内科の知識も必須であること、つまり外科と内科の「兼学」、「兼修」、「兼達」の必要性を主張しているのもあって、「外科と内科を統合して新しく総合科を創設せよ。」とか、あるいは「内科と外科を融合して混然一体とすべきである。」と提唱しているのではないことは明かである。上述した「序」の冒頭にも「先に疾医、瘍医、内外の分有り。内を重んじ外を軽んずるは古より已然たり。」と青洲自身が記しているように、医業はすでに古代から分科していることを青洲は明確に認識しており、医療の基本が内科にあることを自覚していた。したがって、青洲は内科以外の科を専攻する場合、先ず内科を修めなければならないことを強く意識していたことは間違いなく、科を統合しようなどとは毫も考えていなかったことは明かであろう。ここでも青洲が「合」の字ないし「合一」の熟語を使用していないことに注意すべきであろう。

### (4) 青洲の書

青洲には「内外合一」四文字単独の書、ないし「内外合一活物窮理」八文字の書は存在しない。



図2 青洲の書。「欲療疾病当精其内外方無古今唯在致其知」(文献1, 19頁より)

しかし「内外」を含む句の書がある。それには「欲療疾病当精其内外 方無古今唯在致其知」とある(図2)<sup>24</sup>。前掲の「序」の第三番目の句とほぼ同じである。すでに指摘したように最初の句の第二番目の字は「救」でなくて「療」となっている。このことを考慮すれば、この二句は「序」より後年に作られたと推定される。

前述したように最初の句の第七字の「其」は「疾病」を指すから、意味するところは「疾病を治療したいと思うならば、疾病の有する内科的側面、外科的側面を十分に知り尽くさなければならぬ。」ということになる。「燈火医談 後篇」<sup>20</sup>の文では「外科」、「内科」と「科」が付いていたが、ここでは「内外」となって「科」が欠落している。第二句と字数を揃えるために「科」を削除したもので、その分、「内」は身体内部のこと、「外」は身体外部、つまり体表面のことを指すものと考えられやすいが、「精」という動詞を伴っているから、結局「燈火医談 後篇」<sup>20</sup>と同じく、

身体内外の構造・機能の知識に加えて、内科的知識・技術、外科的知識・技術にも精通していることを意味していることになる。

以上、江戸期の諸史料に披見される「内外」について検討してきたが、その意味するところは、医療一般、内科と外科の知識と技術、そして人体の内部、外部の構造と機能など前後の文脈によって様々な意味を包含することが明らかである。しかし注目すべきことは、青洲はいずれの史料においても「内外」の前後に「合」、「合一」の文字や語句を使用していないことである。青洲は「内外」に関連する動詞として「精」を用いているのであり、「内外に精しくあるべきだ」、「内外に精通すべきだ」、つまり「内外の知識を併せ持つべきである」、「内外を兼学すべきである。」と主張しているのであって、「内外を合一せよ。」とか「内外を統一せよ。」とは主張しているのではないことは明かである。青洲が兼学を推奨した証拠は、弟子に発行した免状に「内外治法、金創治法、産科奥術、整骨術」の五科目が記されていることを示すだけで十分であろう<sup>15</sup>。

## 2. 仁井田好古の「華岡青洲墓誌銘」と「内外合一」

管見によれば、標語の一部としての「内外合一」の句が見られる最も古い資料は「華岡青洲墓誌銘」である。青洲をよく知る仁井田好古は、青洲の墓誌銘を作ることを依頼された。そして青洲の死後2カ月の1835年12月に完成したのが「華岡青洲墓誌銘」である。現存する碑には題名がないが、仮にこのように呼んでおく。墓誌銘を作るに際して青洲の近親者から仁井田に示され、それに準拠して仁井田が墓誌銘を作ったと思われる「華岡先生畧伝」は青洲の略歴を知る上で極めて重要な資料であるが、この中には「内外合一」の句は披見されない<sup>25</sup>。このことによって「内外合一」の句の作者は仁井田好古であることが確定したと言ってもよい。碑文中の「内外合一」の句について前後の文章を含めて原漢文とその読み下し文を以下に引用する。なお新字体、新仮名遣いを用いた。引用文の最後の句を図3に示した。





図3 「華岡青洲墓誌銘」(拓本)中の「遂唱内外合一活物窮理之説」の部分

世医所論，局于旧方，泥于経語，不能活用之，又分科為内外，不知合一之理，是安足起痼救沈也哉。乃翻然去，歸其郷，遂唱内外合一活物窮理之説。<sup>26)</sup>

(世医の論ずるところは、旧方に局み、経語に泥んで、之を活用する能わず。また科を分けて内外と為し、合一の理を知らず。是、いづくんぞ痼を起し、沈を救うに足らんや。すなわち翻然として去り、その郷に帰って、遂に内外合一活物窮理の説を唱える。)

意識すれば、「世間の医師は従来の処方墨守し、古い言葉に拘泥しているので、それらを有効に活用することが出来ない。さらに内科、外科と専門科に分科しているため、『合一の理』(ここでは敢えて「合一の理」のままにしておく。)を知らない。このような状態では、どうして病める者を癒し、瀕死の者を救うことが出来るのであろうか。そこで意を翻して故郷に帰り、遂に内外合一活物窮理の説を唱えた。」ということになる。

専門科に分科したことの弊害を述べた条であるから、ここでの「内外」は専門科の代表として「内科」と「外科」である。この「分科」に続いて「合一」の文字が続くので、「合一」を「統合」や「総合」の意に解釈しがちである。動詞の「合」を自動詞に読むと「合一」は「合して一つになる」となり、他動詞に読むと「合わせて一つにする」となるから、どうしても「合一の理」は「細分科した科を総合する」論になってしまう。現代風に表現すれば「総合診療科を作らなければならないとする考え」というような解釈になりがちである。しかし「合一之理」の意味するところは、総合的、学際的に診療することである。仁井田が「合」の字を用いたのは、その前に「又分科(また科を分かちて)」の「分」の字があるからである。仁井田が儒者であるから、王陽明の「知行合一」<sup>27)</sup>の「合一」を援用したのであろうが、この「合一」と青洲の医学を表現する「合一」は意味するところが少しく異なる。繰り返し述べてきたように、青洲の意図するところは、外科などの細分化された専門「科」ばかりを学ぶのばかりではなく、その基礎となる内科を含めた複数科の兼学であり兼修であった。現代の用語でいえば学際的研修、集学的研修ということになる。青洲の心を忖度して仁井田は最も相応しい「兼修」または「兼学」の語句を「合一」に代えて採用すべきだったと思う。「八宗兼学」という一般に知られた熟語もあったことを考慮すれば、「兼学」の熟語を仁井田が知らなかったはずはない。これを考慮すると、複数の科目を学習することに対する仁井田の理解が十分ではなかったと著者は推察している。

このように仁井田が「内外」に続いて「合一」の文字を使用したために、これが発展的に拡大解釈されて誤った見解が生まれた。例えば松村<sup>28)</sup>は「内外合一」の基底には「内外一理」の認識があると述べている。

儒学と医学の分野は異なり、「内外」の語の含意するところは異なるが、華岡青洲のいわゆる「内外合一」・「内外一理」の口号は、明らかに宋代の理学に由来するものであり、青洲はい

わゆる朱子学から、「一理」の一貫という観点あるいは発想を継承していると言うことができる。 (旧字体は新字体に直した)

「内外合一」を青洲の言葉としたために、青洲と朱子学を結び付けると言う苦しい解釈をせざるを得ないのである。この「内外合一」の句は青洲自身の言葉ではないので、松村の解釈は成り立たないことになる。

### 3. 浅田宗伯の「皇国名医伝」と「内外合一」

浅田宗伯(1815-1894)は1851年に「皇国名医伝」を著したが、「卷之下」25丁表から26丁表まで青洲の伝を収めている<sup>29)</sup>。「内外合一」に関連した条を原文のまま示す。比較のためその下段に仁井田の撰した「華岡青洲墓誌銘」から浅田の文に対応する文を示す。旧字体を新字体に直した。句読点は著者による。

#### 浅田の文

震学于吉益氏，又従大和見水，受外治。歴遊諸州，研磨其術。既帰，剏内外合一活物窮理之説。曰。方無古今，内外一理，泥古不可以通于今。略内不可以治於外，蘭医密於理，而麤于法。漢学精于法，而拘於跡。

#### 仁井田の文

又従吉益南涯翁，講気血水。又師大和見水翁，学外治。其他所従遊。……世医所論，局于旧方，泥于経語。不能活用之。又分科為内外，不知合一之理。……乃翻然去，帰其郷，遂唱内外合一活物窮理之説。……今言蘭者，密於理而略於法。奉漢者，精於法而泥於跡。

語彙，語順から一読して浅田の文章は仁井田の撰した「華岡青洲墓誌銘」を基にして作られたことが明らかであろう。本稿で問題にしている句「遂唱内外合一活物窮理之説」については、冒頭の「唱」を「剏」(はじめる)に変えて「剏内外合一活物窮理之説」としたただけである。この浅田の記述によって仁井田の「内外合一活物窮理」の

説が江戸時代末期において踏襲され始めたことが知られる。このことを傍証するのが藤澤東咳(1794-1864)の「華岡青洲翁賛」である<sup>30)</sup>。賛にいう。「古今貫法。内外合科。発未発秘。救難救病。南州奇地。爰出奇士。頼而蘇者。四海是盈。從而游者。至自萬方。人以術顯。術以人聞。」

この賛がいつ作られたかは不詳であるが、藤澤が没した1864年以前であることは間違いない。ここでは「内外合一」ではないが、それよりもさらに明確に「科」を統合するという「内外合科」の熟語を用いている。四言詩の形をとっている点は仁井田の「華岡青洲墓誌銘」の末尾にある四言詩の讃と同じであり、藤澤が仁井田の墓誌銘から影響を受けたことを窺わせる。

以上に述べてきたことによって、「内外合一活物窮理」の八文字の標語は長年、華岡青洲自身の言葉と考えられてきたが、後半の四文字「活物窮理」が青洲の言葉で、前半の四文字「内外合一」は青洲の墓誌銘を撰した仁井田好古の言葉であることが明らかになった。青洲の意図したことは「内外」の「合一」ではなくして「内外」の「兼学」であった。青洲が「内外合一活物窮理」の八文字を唱えたという説を改めるべきである。

### 参考文献および注

- 1) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京:吐鳳堂; 1923. p.19.
- 2) 富士川 游. 日本医学史(決定版). 東京:日新書院; 1941. p.442-443.
- 3) 関場不二彦. 西医学東漸史話(下巻). 東京:吐鳳堂書店; 1933. p.219.
- 4) 大鳥乱三郎. 明治前日本外科史. 日本学士院日本科学史刊行会編. 明治前日本医学史(第4巻). 東京:日本学術振興会; 1965. p.808.
- 5) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖 華岡青洲. 那賀:医聖華岡青洲先生顕彰会; 1964. p.14-17.
- 6) 藤野恒三郎. 日本近代医学の歩み. 東京:講談社; 1974. p.173.
- 7) 宗田 一. 華岡青洲(解説)大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29(華岡青洲 一). 東京:名著出版; 1980. p.50.
- 8) 阿知波五郎. 医学史点描(阿知波五郎論文集 下). 京都:思文閣出版; 1986. p.204.
- 9) <http://ja.wikipedia.org/> 2016年10月13日閲覧.

- 10) <https://www.google.co.jp> 2017年3月3日閲覧.
- 11) 松木明知. 華岡青洲研究の新展開. 東京：真興交易(株)医書出版部；2013. p. 83-93.
- 12) 松木明知. 「活物窮理」の四文字が華岡青洲の金言である. 日本医史学雑誌 2016；62: 439-444.
- 13) 松村 巧. 華岡青洲の医学思想. 日本中国学会報 2007；59: 292-312.
- 14) 松木明知. 華岡青洲の新研究. 弘前：松木明知；2002. p. 107-143.
- 15) 文献1. p. 442-443.
- 16) 高橋 均, 松村 巧. 華岡青洲自筆「序」考一現代語訳および注解一. 近畿大医誌 1999；24: 397-399.
- 17) 「乳巖治験録」の末尾において, 青洲は「之を同志に示すため, 図を作り之を識すというのみ」(原漢文)と書いているから, 1804年の末頃には, 少なくとも, 図を含んだ小冊子を作る意志はあったと思われる. しかし1809年5月に赤石希范が乳癌手術の図譜を出版しようと計画した時に青洲は消極的であった. このことについては下記文献を参照のこと.  
松木明知. 春林軒門人赤石希范による乳癌手術図譜出版の計画. 日本医史学雑誌 2016；62: 305-313.
- 18) 「救」と「療」の漢字の語義については, 以下の文献に依った.
- 諸橋徹次著. 大漢和辞典(巻五). 東京：大修館書店；1957. p. 508.  
同(巻七). 東京：大修館書店；1958. p. 1200.
- 19) 文献1. p. 381-387.
- 20) 華岡青洲. 燈火医談 後篇. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29(華岡青洲 一). 東京：名著出版；1980. p. 383.
- 21) 文献1. p. 90-91
- 22) 宗田 一. 収載書解題(燈火医談). 文献7. p. 56-57.
- 23) 京都大学附属図書館所蔵(富士川文庫). (請求番号 和小セ/47)
- 24) 文献1. p. 19.
- 25) 文献11. p. 39-45.
- 26) 文献11. p. 47.
- 27) 王陽明(山田 華, 鈴木直治訳注). 伝習録(巻之中, 人の学を論ずるに答ふる書)(岩波文庫). 東京, 岩波書店, 1977. p. 118-122.
- 28) 文献13. p. 297.
- 29) 文献11. p. 59-62. 写真版として覆刻してある.
- 30) 藤澤南岳輯. 東咳先生文集(巻之九). 大阪：泊園書院；1884. 一丁裏.

## Seishu Hanaoka Did Not Write *Naigai Goitsu*; Kohko Niida Wrote It

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Since the end of the Edo era it has been widely believed that *Naigai Goitsu Katsubutsu Kyuri*, which consists of eight Chinese characters, was Seishu Hanaoka's motto. There is definitive proof that the second half, *Katsubutsu Kyuri*, originated with Hanaoka, but no reliable historical documents substantiate the claim that he wrote the first half. A meticulous examination of the historical records has now revealed that Kohko Niida added *Naigai Goitsu* in 1835, when he composed Hanaoka's epitaph. Although Hanaoka strongly encouraged medical students to study both internal medicine and surgery, he did not advocate integrating them to found a new specialty. Accordingly, his motto was simply *Katsubutsu Kyuri*, comprised of four Chinese characters.

**Key words:** Seishu Hanaoka, Koko Niida, *Katsubutsu Kyuri*, *Naigai Goitsu*, epitaph